

スズムシの育て方

藤沢市科学少年団

まず飼育箱の準備

下が透明なプラスチックやガラスでできた虫かごまたは水そうを用意します。その底に園芸用の「赤玉土（小粒）」を3センチぐらいの深さに敷きつめ、上から下まで一様に黒くなる程度に水をまいて湿らせませす。その上に隠れ家（シェルター）を用意してあげましょう。スズムシは比較的暗いところを好み、物陰に集まります。脱皮するときには体を固定するための手がかり足がかりにもなります。園芸用のジフィーポット（苗を育てるための水苔を固めた小型植木鉢）を半割りにしたものがおすすめです。安くて、汚れたら手軽に交換できて、処分も楽です。

スズムシの餌

スズムシには魚粉などのタンパク質と水分をとるための野菜を与えます。昔からスズムシの餌といえば煮干とキュウリ、ナスが定番のように言われていますが、煮干丸ごとよりは粉碎して魚粉になっているほうが食べがよく、よく育ちます。

魚粉は「スズムシの餌」としても売られています。釣りの餌、鳥の餌として売られているものやカツオブシでもOK。ビンの王冠などに少量を盛って与えます。カビが生えないように、少量与えて、食べきったらつぎたします。

野菜で最適なのはキャベツです。調理では捨ててしまうキャベツの外葉をとっておいて5cmぐらいの大きさに切って与えましょう。キャベツは腐りにくいので食べ切るまで数日から1週間放っておいても平気です。いたんだり、干からびたものはとりかえます。

アリやダニからスズムシを守ろう

スズムシの天敵はアリです。アリの道がつくと一日で全滅します。普通の飼育箱のふたではアリがすき間をくぐってしまいます。スズムシ自身も小さいうちはすき間をくぐって脱走してしまいますので、飼育箱の上にガーゼや木綿などの布をかけて、その上からふたをかぶせます。これはダニの予防にもなります。

庭土や天然の砂をとってきてそのまま使うのも危険です。土の中にはスズムシをねらういろいろな生き物がすんでいます。土は園芸用の「赤玉土（小粒）」が最適です。スズムシは外敵の多い自然の中では生きられないひ弱な昆虫なのです。

スズムシの脱皮を観察しよう

スズムシは約1週間ごとに脱皮をくり返して成長し、はじめは数ミリだった体長がやがて2センチほどになります。はじめはオス・メスの区別が付きませんが、成虫になる直前にはメスの尾部に短い産卵管が見えてきて、オスメスとも背中にはねになる部分が現れます。

成虫になったオスはまもなくはねをこすり合わせて独特の美しい声で鳴き始めます。鳴く時期は夏から秋にかけてです。スズムシの活動時間は夜間です。夕方から翌朝にかけて鳴いたり食べたり活発に動きます。昼間は暗がりです。

さんらん

産卵の準備

オスが鳴くようになると間もなく卵を産む時期です。最初の鳴き声を聞いたらすぐに土を替えましょう。翌年まで卵を保持する土になりますから、全部新しい土と交換して引っ越します。前述のように園芸用の「赤玉土（小粒）」がいいでしょう。土は上から下まで一様に黒くなる程度に水をまいて湿らせておきます。産卵後は土の交換はできないので、時期をのがさないように気をつけましょう。

準備ができたからお引っ越しです。シェルターを入れてあれば多くのスズムシはシェルターにつかまっていますからシェルターごと移し替えられます。土の上を歩いているものは小箱に追い込むなり、手のひらに乗せるなりして運びます。体を傷つけますから指でつまんではいけません。

冬の間の卵の保存

成虫のメスはたくさんの卵をその大きなお腹に蓄たくわえています。長い産卵管を土に突き刺して、0.5～1.5センチの深さのところに一つずつ卵を産み付けていきます。スズムシの卵は長さ3ミリほどの細長い形で象牙色をしています。

秋が深まり、産卵の時期が過ぎるとオスもメスも間もなく死んでしまい、卵だけがあとに残ります。親の死骸や食べ残しの餌はとりのぞき土の上はきれいにします。産み付けられた卵には手を触れずに、そのまま飼育箱ごと放置します。

冬の間の保管について「殺菌・保湿のために炭を入れるとよい」とか、「時々霧をふいて湿らせる」などと言われますが、全くの迷信です。土がカラカラに乾いてしまっても卵はちゃんと生きています。翌年の春まで何もする必要はありません。アリが入らないように布をかぶせてその上からふたをし、玄関や床下など陽の当たらないところに置いて、桜の時期を待ちます。

卵をかえしてみよう

春になって、桜の花の咲く頃が水やりのタイミングです。土が上から下まで黒く湿った状態になるようたっぷり水をやり、以後時々水を補給して土が乾かないようにします。びしょびしょになって水が浮くようではやりすぎです。「湿っているが水びたしでない」状態に保つのがコツです。

最初の水やりから約30～40日で卵が孵化ふかしはじめます。生まれてくるまでは卵が生きているかどうか気がかりなものですが、透明感のある象牙色を保っていれば卵は生きていると見てよいでしょう。

孵化したばかりの1齢幼虫いちれいようちゅうは体長3～4mmで、アリぐらいの大きさと真っ白な色をしています。孵化後数時間で黒い色に変わっていきます。小さい上にあいまいな保護色で濡れた土の色と見分けにくいので、よく見ないとわかりません。孵化の予定日が近づいたら毎日飼育箱の中を注意して見る必要があります。孵化したらすぐに餌を与えなければなりません。見のがして餌やりをおこたると共食がしいや餓死で全滅する恐れがあります。気をつけましょうね。

うまく卵をかえせば、数は前の年の10倍になります。挑戦してみてください。

【参考】スズムシ日記 <http://www2.hamajima.co.jp/~tenjin/album/insect/suzumusi.html>